

人とのつながり 一個の空間と扉

石塚則子

奨励者紹介[いしづか・のりこ]

同志社大学文学部教授

[研究テーマ]19—20世紀アメリカ文学

「人にしてもらいたいと思うことを、人にもしなさい。自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな恵みがあるか。罪人でも、愛してくれる人を愛している。また、自分によくしてくれる人に善いことをしたところで、どんな恵みがあるか。罪人でも同じことをしている。返してもらおうことを当てにして貸したところで、どんな恵みがあるか。罪人さえ、同じものを返してもらおうとして、罪人に貸すのである。しかし、あなたがたは敵を愛しなさい。人に善いことをし、何も当てにしないで貸しなさい。そうすれば、たくさんの報いがあり、いと高き方の子となる。いと高き方は、恩を知らない者にも悪人にも、情け深いからである。あなたがたの父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深い者となりなさい。」

(ルカによる福音書 6章31—36節)

こんにちは、文学部英文学科の石塚則子です。今年は梅雨が長引いて、まだ6月ぐらいの感覚なのですが、来週で春学期の授業が終わろうとしています。学期末でレポートやテストの準備に追われていらっしゃるかと思いますが、このように水曜チャペル・アワーの時間をもつことができたことに感謝いたします。私の専門は19世紀から20世紀前半のアメリカ文学です。現在の研究の関心は、建築や室内装飾と文学テキストの関係です。今日は「人とのつながり一個の空間と扉」と題して、お話ししようと思います。

女性が小説を書くこと

20世紀初頭に、あるイギリスの女性作家がケンブリッジで講演を行いました。作家の名前はヴァージニア・ウルフ(1882—1941)で、その時の講演を基にして書かれたのが、1929年に出版された『自分だけの部屋』というエッセイです。ウルフの講演のテーマは「女と小説」、つまり世の中で女性が一人の自立した人間として物語を書くことが、それまでの歴史の中で如何に大変なことだったかということ、男性作家の社会的地位との違いを皮肉りながら論じているものです。

皆さんは、女性が本を書く、つまり文学作品を書くには何が重要だと思いますか。現代では、ネットなどのさまざまなメディアで女性の書き手が作品を公開することはごく当たり前のことになっています。今年の直木賞の候補者は、初めて女性作家ばかりだと聞いています。しかし、ウルフが講演をしたのは90年ほど前の20世紀初頭のことで、18世紀から19世紀半ば、女性が自由に文学作品を書いてお金を稼ぎ、経済的に自立し、しかも社会的に認知されることは難しい時代でした。イギリスで女性に参政権が認められたのは、100年前の1918年です。しかも30歳以上の女性に限られていました。また、既婚女性が財産を所有することが

認められたのは、1882年でした。

さて、皆さん、どんな答えが頭に浮かんできますか。19世紀末から20世紀初頭、ウルフが投げかけた質問、女性が小説を書くために必要なものはなんでしょう。文才でしょうか。想像力、作品を書く忍耐力でしょうか。ウルフの答えは「年に500ポンドの収入と鍵のかかる自分だけの部屋」でした。

500ポンドというと、当時でもかなり裕福な生活を保証されていたようですが（イギリスは階級社会ですのでなかなか平均的な生活を想像するのが難しいかもしれません。当時、たとえば上流社会の家に仕える執事の年収は大体60ポンドだったと言われています）、ウルフ自身、定職についていたわけではなく、生活の基盤は伯母からの遺産でした。しかし、当時の社会において、経済的に自立できることは、女性にとって大きな意味をもちました。ウルフにとって、伯母からの遺産は日々の生活を担保すると同時に、そのお金で自由に旅行をしたり、いろいろな経験をしたりすることで視野を広げることができたのでした。

もう一つの条件は、「自分だけの部屋」です。しかも、家族共通の居間から少し離れたところにある、鍵のかかる部屋です。イギリスもアメリカも、近代化によって、男性が外に働きに出て、女性が家庭を切り盛りし、社会の中で男女の領域が分かれていくことはご存知だと思います。こうした変化は、住居の構造をも変えていきました。中世の時代は使用人や親戚なども含め大家族が、大きなスペースで雑魚寝をしたりして生活空間を共有するのが一般的だったようですが、近代化が進むにつれて、核家族化が進み、家の中に廊下ができ、家の空間の細分化、個室化、機能分化が進みました。つまり、近代になって、「個人」という概念ができるのと同時に、家の構造も変わっていき、中流家庭では自分の部屋をもつことができるようになったのです。

先ほども申しましたように、18世紀から19世紀初めまでイギリスやアメリカで女性が小説を書いてお金を稼ぐこと自体が社会的に認知されませんでした。それでも女性たちは、家の台所のテーブルで、家事や子育ての片手間に書いていたのです。創作に携わる者にとって、誰にも邪魔されずに、ひとりで物事を考えられる空間をもつことの大切さをウルフは言いたかったのです。「個人」や「プライバシー」という概念もこの頃から生まれてきました。

ウォートンの創作活動

ウルフより20年ほどさかのぼりますが、イーディス・ウォートン（1862—1937）という女性作家がいました。ウォートンは、アメリカのニューヨークの上流階級に生まれました。幼い頃から想像力が豊かで、詩や短編小説を書いていたのですが、上流階級の女性が作家として社会的に認知され、しかもお金を稼ぐことは許容されない時代でした。しかし、幸運なことにウォートンは、親戚の遺産を相続しました。つまり、自分が自由に使える財産をもつことができました。ウォートンはその財産を使って、土地を買い、建築の素養を生かし、自分の家を設計し、豪邸を建てることができました。そこで自分が小説を書くことができる「自分だけの部屋」を確保し、1905年ぐらいから作家として自立した人生を歩み始めます。ウォートンが作家として成功する一つのカギは、上流社会の社交や妻としての役割から離れ、ひとりになって、一個人として創作に専念できる空間を確保したところにあります。彼女の日課は、午前中は自室で小説を書き、午後は友人や知人との社交に時間を使い、当時の女性としては珍しく、プライベートな時間を切り分けることができたのです。

自分と他者との距離

人間が生きていく上で、ひとりの空間や時間をもつこと、つまり社会との距離の取り方は大事です。その一方で、人間はひとりでは生きていけませんし、何らかの形で社会や他者とかかわっています。大学生活を、社会に出る前のモラトリアムと言われることがあります。幼い頃からの家族との生活から社会人として自立するまでの準備期間、つまり守られた環境から自立した環境への移行期だということです。自己を確立しつつ、他者とのようにかかわっていけばいいのかを学ぶ期間ではないでしょうか。そういう時期は他者との距離をどのように取ればいいのか、時として不安になることがあると思います。

「社会」という言葉を英語では、societyと言います。この単語 society が近代化とともに明治の日本に入ってきた時、福沢諭吉は「ソサエチー」という言葉を「人間交際」と訳したそうです。やがて「社会」という言葉が使われるようになったそうですが、人間関係が社会を作り、また社会の中で個人が作られていくことがよく分かります。皆さんも時として、他者とのかかわりが煩わしく、自分だけの世界に逃げ込みたい衝動に駆られることもあるでしょう。1年生の中には、高校生から大学生になって、いきなりさまざまな変化に遭遇し、春学期の最初の頃、つまり4月、5月にこの広いキャンパスの中でどのように身を置けばいいのか、いっそ、授業に行かず、ひとり下宿で過ごす方が楽だと思ったことはないでしょうか。サークルやクラブなどの人間関係の中で、時として摩擦が生じたり煩わしくなったりして、そこから逃げてひとりになりたいと思われたことはないでしょうか。

個人主義とプライバシー

ウォートンが作家として活躍し始める20世紀初頭、アメリカ社会でプライバシーがある種の人権として認められるようになりました。その時アメリカの法曹界でプライバシーは「ひとりでほっといてもらえる権利」と定義されました。プライバシーが一つの人権、つまり人として法的に保障されるべき権利として認められたことは重要で、その契機となったのは、新聞メディアのスキャンダルの取り上げ方に当事者の個人が著しく不快感、つまり自分の家族や個人の生活を暴かれることに憤りを覚え抗議したことでした。

こうしたことは、現代の私たちの社会にも見られることです。個人情報や個人のプライバシーを守ることが特に最近重要視されるようになってきました。大学や企業なども個人情報の取り扱いに対してとても神経をとがらせています。たとえば、以前は卒業が決定したら学籍番号を掲示板で張り出して発表していましたが、本人の許可なくして個人を特定できるような情報を公の場で公表することができなくなりました。またその一方で、さまざまなメディアが発達し、簡単にSNSなどで他人のプライバシーを侵害するようなメッセージや写真を誰もが簡単に世間にばらまくことができる、情報を操作したある種の暴力行為が残念ながら横行しています。

個人の生活や情報に他人がどこまで踏み込めるのか、他人がどこまで知りうるができるのか、明快な線を引くことはできません。「おせっかい」という言葉と、「思いやり」「気遣い」という行為の感覚は人それぞれちがうでしょう。社会的につまり外圧的に個人のプライバシーを守ろうとする機運が高まると、他者の情報や心情に対するガードが必要以上に高くなり、他人の心情を読みにくかったり、慮ることが難しくなったりもします。昨今のコンプライアンスや法律などで、人と人とのつながりや関係性に必要以上に杓子定規に線引きをすることが、本当にいいことなのか、疑問に思うことがあります。

人とのつながり

先ほど紹介したウォートンは小説家として成功しますが、小説を世に出す前に、建築に対する造詣が深かったため、1897年、ちょうど19世紀の終わりに家の構造や室内装飾についてのエッセイを出版しました。ウォートンが家の構造で重要視したのは、まさにプライバシーや個人の快適さや嗜好を追求することでした。そこで、とても興味深いことを述べています。「普段扉は閉まった状態であるべきである」「扉の役割は、人を招き入れるとともに、他人を中に入れないことである」。これは、「人間には空間とつながる権利とともに、空間を遮断する権利がある」という、ドイツの社会学者ゲオルク・ジンメルという言葉と共通するものがあります。

日本では、家の中のふすまや扉は閉めるのがマナーとなっています。自分の部屋に入ったら、皆さんも部屋のドアを閉めると思います。欧米では、トイレや洗面所などの共有スペース、それから個人の部屋の場合、使用中もしくは入ってほしくない場合は、ドアは閉めますが、他人が入ってもいい状態の場合は、ドアを開けておくのがマナーです。このようにドアには、自分と他者あるいは外の世界とのバリアであると同時につなげる役割があるわけです。

自分の世界と外の世界

本日は、ウルフやウォートンといった20世紀初頭の女性作家の生き方や考え方をお話ししながら、プライバシーの尊重と他者との距離の取り方の両立の難しさをお話ししてきました。自分の世界と外の世界、自分と他者の関係性は、法や社会が外圧として何らかの基準や規制を設けるよりも、個々人が人間として相手を尊重する、あるいは他者を思いやり共感する力を大事にすることが理想だと思います。現代において、自分の世界と外の世界をつなぐ、あるいは自分と他人の世界を区切る「扉」を自らコントロールする見識や主体性が必要なのではないでしょうか。こうした扉を動かす自分の心の動きは、新島のいう「良心」に通底するものではないでしょうか。先ほど引きましたドイツの社会学者ジンメルは、人間は自分の世界を扉で閉めてひとりの世界をもつことができるが、そうすることで、また扉を開けさえすればいつでも外とつながりをもてる、あるいはもちたいと思う欲求が生まれることが大事だと述べています。他者への思いやりや共感する力を養いながら、自分の世界と外の世界の関係性を自分なりに構築して行ってほしいと思います。ご清聴ありがとうございました。

[参考文献]

ヴァージニア・ウルフ 『自分だけの部屋』 川本静子訳 みすず書房 1999年

Edith Wharton and Ogden Codman, Jr., *The Decoration of Houses*, W. W. Norton, 1978

ゲオルク・ジンメル 『ジンメル・コレクション』 北川東子・鈴木直訳 ちくま学芸文庫 1999年

2019年7月17日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録